

『日本の教育』一九五五年三月十一日（新日本教育協会）

# 科学は否定されるのか

## 社会科改訂の基本問題

矢口 新

### ○ 科学否定の基本精神

異例な文相談話による要旨説明を伴って発表された、今回の社会科改訂案に対しては、各方面から早くも非難が浴びせられている。文相がなみなみならぬ関心を示して、みずから筆を加えたというだけあって、たしかにその内容にはなみなみならぬものがあるようである。それは改訂の随所にみられる、科学にたいする否定的な傾向である。それが最もはつきりあらわれているのは、文相談話の次の一節である。

「従来の社会科では、社会の機構や機能を中心として扱う傾向があったが、こんかいこの点を改善して“個人の生活態度や、芸術・宗教・生命の尊さ、自然や人間の美しさ、また個人の意思や努力の価値などに目を向けさせるように留意した。”（“筆者）

これはたいへんなことである。社会科の基本的なものを否定することではないだろうか。いったい社会科がこれまで努力してきたのは、確かにいわれているように、社会の機構や機能を明らかにすることであった。それは社会の現実を明らかにし、その中から課題を発見し、よりよい社会生活を建設しようとする理想を持たせ

んがためである。そこには、社会生活の眞実を発見させようとする眞理追究の精神があったのである。その眞理をきわめ、眞理をまもる情熱を根底にして、人間性を養おうとするのが社会科であったはずである。

こういふ社会の現実を見ることを土台にしないで、ほんとうに文相のいうがごとき、人間の心の美しさや、個人の意思や努力の価値というものに目を向けさせることができるであろうか。

たとえば、従来社会科では、社会保障の現実を問題にする。社会保障は現在しだいに進歩して来て、おたがいにひとびとが助けあうという人間の美しい心を現実に実現しつつある。しかもまた一方足りないところも多い。われわれが美しい心を更に發揮するところはどこであるか。それはかくかくのところである、こういうように社会の現実において、われわれの心の美しさをいかに發揮するかを問題にしてきたのである。

このだいたいな地盤をすてて、個人の美しさや、個人の生活態度などをどうして教えることができるだろうか。この文相談話のごとくしたら、単なるお説教になるだけではないか。文相はただ人間の心が美しいとお説教すれば足りるといふのだろうか。美しいところもあり、美しくないところもある現実を見て、より美しい現実をつくるにどうするかをたえず考えさせてゆくとともに、美しいものを育てようとする眞情熱をもった人間も育つのではないか。眞実に根ざす意欲でなければほんものではない。一片のお説教は、単なる情緒にすぎない。現実から離れた人間の美しさなどというものは、戦争中の万邦無比の論になるのである。これはどうしてもいただけない基本精神である。これでは社会科問題協議会から、愚民政策といわれてもしかたがないのではないか。

こういった科学否定の精神が自覚されて、改訂案ができていたのはいへんであるが、そうではない。しかしどことなく、そういうにおいがするのは、やはり地金があらわれているということであろうか。

### ○ 小学校は郷土教育的地歴教育

小学校では、各学年の具体目標というのが、一年は学校と家庭、二年は近所の生活、三年は村や町の生活、四年が郷土の生活、五年が産業の発達と人々の生活、六年が日本と世界というような主題でまとめられて、全体として地理的、歴史的知識を重視している。また単元の基礎となる学習領域案というのにも、文相談話にあるように社会機能でなく、たとえば三年の「村の様子と人々の仕事」「村の人と町の人」「昔の村の今の村」、四年の「私たちの村と郷土」「大きな町とその働き」などといった、いわば郷土誌的なものが多く入れられた。

この考え方は今から三十年ほど前の郷土教育に逆行しているのであって、時代おくれであるばかりでなく、危険でもある。社会科の基本的な考え方では、現代社会の問題は何かといった見地で、社会機能に即して社会科の学習問題をさがし、その問題について科学的な究明をできるように考えられてきた。ところが今回のよう

に村のようすとか、郷土のようすとかを知らせるといった考え方になると、基本的な社会の問題とか機能とかの視点がなくなるから、村や町や郷土のことをあれこれと何でも教えるようになるであろう。村について知るとか、町について知るとなると、やれあのお寺はいつからあつてどうしたとか、こっちの建物はどうだとか、そういうものが無数に数えあげられることになる。そうして雑多な知識がまん然とつめこまれる。そこには科学的な見かたは働かない。ただあるものをおぼえるといった、いわば通俗性、伝統的なものへの追従という傾向が強くなるう。

### ○ 中学校の地歴教育は国づくし

中学校においては、小学校で遠慮していたらしい視点のない地理、歴史が前面に出ている。地理的分野というのは、要するに昔の地誌であり、国づくしと大してちがわない。「日本の諸地域」「全体としての日本」「世界の諸地域」「全体としての世界」「郷土」といった指導内容のまとめかたでは、とりあげられるものは、小学校以上に視点のない雑多な好事家的知識となる恐れがある。

歴史についても同様である。「人類文化の始原時代」「武士が社会に現出した時代」といっ

た風にいわゆる通史を指導するのである。ここでも、あれもこれもと書き並べられた教科書が愛好される結果となるう。

### ○ 修身的道徳教育再現の恐れ

道徳教育については、小学校、中学校において全面的に行われるようにしたと改訂の要旨はいっている。小学校ではところどころおかしところはある。小学校でも総じてその点は確かに認められる。それは、小学校でとり扱われる問題やほたらきの見地から構成されているものが相当にあるから、必然的にそうなるのである。たとえば家庭の生活とか学校の生活とか、近所の生活とか、社会の保全の問題とか、産業の問題とかをとり扱えば、おのずから道徳の問題がはいるのである。

ところが中学校では、さきにのべたようなたてまえの内容構成であるから、むつかしい。「世界の諸地域」について地理を教えるところではひとびとの協力をとけといっても、これはまるで木に竹をつこうというようなものである。また歴史的分野でもそうであつて、そこで道徳を教えようとすれば、むかしの修身史観にでもなるほかはあるまい。それでは歴史でもなくなる。

## ○ 独善的な改訂の手續き

以上みたように、この改訂案は、文相の異常な関心にもかかわらず、あるいはそれゆえにであるかも知れないが、きわめて時代錯誤的なものと断ぜざるを得ない。しかも最後にもう一つ述べたいことは、この改訂案の作成の経過についてきわめて不明朗なものがあることである。

この改訂案の原案が教材等調査研究委員会の手によってできあがったのは、すでに昨年末であつたが、その後二カ月近くも文部省の首脳部のあいだで、これにたいする検討が加えられている。これはきわめて慎重な態度であつて、けっこうなことであるが、その結果、原案と非常に異なつたふんい気をもつた修正が行われた。にもかかわらず、これが調査委員に一言もはかられずに、決定されていることである。その修正が天皇に関することをことさらに強調しているという時代錯誤のことは問はずとも、いつたいそういう修正が自由におこなわれてよいものであるうか。専門家が熱心に研究して作成したものが、政党人や官僚というふうによつて思いつき的に書きかえられてしまつてよいものであるうか。そういうことは当然委員に相談されるべきことではないか。

しかもさらに奇怪なことは、この修正にあつて文部省になにか暗闘らしいものがあつた

かにいわれていることである。某視学官が辞表を提出したなどといわれているが、要するにきつねとたぬきのばかしあいではないか。調査研究委員会に公式にはかつて決すべきことを二、三の官僚で独断しようというところに、そういう問題も起こるのである。われわれは、そこに極めて暗いものを感じずにはいられないのである。

教育の内容の改善などということは、いうまでもなく科学的、客観的研究にもとづいて、一歩一歩着実に実施していくべきもので、しろうとの一時の思いつきなどによつておこなわれるべきものではない。だからこそ、教材等調査研究委員会も設けられたのであるのに、その委員会を全然つんぼ座敷において、今回の発表がおこなわれたのはきわめて遺憾(憾)なことであつて、そこには何か重大なセンスの欠陥が想像される。でなければ異様な意図を想像させるものがあるのである。こういうことが、しろうと官僚による教育支配という伝統をつくることになつては、由々しきいちぢいといわなくてはならぬ。

(国立教育研究所員)